利用件数からみた資料費配分の評価法について

Balancing Cost with Use : A Basic Trial for Collection Development

小野澤 繁 雄*

埼玉医科大学附属図書館

Onozawa S. : Balancing Cost with Use : A Basic Trial for Collection Development. *Igaku Toshokan* 1987 ; 34(1) : 7-11.

First, we compared the annual use of books with the annual use of journals, then we compared the annual costs of the two. Then, we put their use against their cost, and several basic points for collection development were obtained. Use and cost studies were divided into 4 parts, books published in the home country and in other countries, journals in the home country, and others. The results show that the ratio of use and cost of books versus journals was 1 to 4, and that the annual cost of each is balanced by its use. Furthermore, the ratio of in-service use of journals published in the home country to the use of journals in published other countries was 1 to 2. Part of the cost of books seems to be borne by the budget of the faculty.

さいきん読んだ「ヘルスサイエンス図書館員の基礎知識」のなかで選書方針に触れた所があって、とくに「図書の雑誌に対する割合」という部分に興味をもった。¹⁾

図書館の図書や雑誌の選択では予算がもちろん最大の制約的要因である。(選書)方針には図書の雑誌に対する割合などの点も考慮すべきだ。決った規則はないが、多くの図書館では雑誌 $\frac{1}{3}$ 、図書 $\frac{2}{3}$ を基礎に管理している。

同ような表現が Handbook of Medical Library Practice (3版)にもみえている。(このことは後でしった)²⁾

以下に考えたことは、このことに関係している。

資料費配分を和、洋の単行本、国内、外国誌に分けて、基礎的議論をこころみた。

図書館開設以来10余年を経過したので、おのずから、

収集についても一定のパターンができてきている。ここでは、利用件数からこのパターンをみたらどうなるか、かんがえてみた。きわめて簡便な方法をとったので、あるいは平面的なものにとられるかもしれないが、深刻なところをもとめなければ、簡便な方法であるので、利点もあると思われる。

(数字はとくにことわっていないければ昭和60年度についてのものをつかっている。又、対象は専門課程本館にかぎられる。進学課程分館、総合医療センター分室はのぞかれる。したがって、コレクションの範囲は医学図書館のそれになっている)

さいしょにかんがえたこと

単行本と雑誌の利用比率について

さいきんの5年間をとると、利用傾向、収集傾向いずれも安定したところになっしている。(この一つの理由は、予算にあるわけだが)ただ、この2つの傾向を関係させてみる方法があれば、お互いを従来以上によくみることができると思われた。

イン・サービスの利用件数をつかまえるのに必要なものとして、貸出件数(新着雑誌の一夜貸しを含む)

* Shigeo ONOZAWA : Saitama Medical School Library. 38 Morohongo, Moroyama-machi Iruma-gun, Saitama, 350-04, Japan

(昭和61年10月22日 受理)

と複写件数をさいしょにかんがえた。貸出件数と複写件数をとりあえず等価のものとみなすことにすると、表1－3の数字がえられた。百分比によれば、利用件数からみた単行本と雑誌に対する利用率はそれぞれ19.2%、80.8%となって、雑誌のほうがよくつかわれている。いいかえると、1対4の比率で雑誌に対する依存度が高いと見ることができよう。

表1. 貸出件数からみた利用はどうか

	単 行 本	雑 誌	計
貸出件数	6,505	1,221	7,726
百 分 比	84.2	15.8	100.0

表2. 複写件数からみた利用はどうか

	単 行 本	雑 誌	計
複写件数	223	27,087	27,310
百 分 比	0.8	99.2	100.0

表3. 単行本と雑誌を利用件数からみると

	単 行 本	雑 誌	計
利用件数	6,728	28,308	35,036
百 分 比	19.2	80.8	100.0

貸出と複写のそれぞれのサービスに対するありかたは、貸出では単行本が、複写では雑誌の比重が高い。それらを合算した数字では、(1対4の比率で)雑誌の(利用件数全体に占める)割合が高いことが読める。利用の80%が雑誌ということになった。

単行本と雑誌の資料費比率について

図書館費と研究費に分けてかんがえる必要がある。表4の数字は雑誌84.5%と1対5.5で雑誌の比重が高い。表5の研究費では、単行本にいくらか比重を移した配分になっている。このことは別に問題をつくっている。

表4. 図書館費を単行本と雑誌についてみると

	単 行 本	雑 誌	計
図書館費	8,314,745	45,264,805	53,579,550
百 分 比	15.5	84.5	100.0

表6の数字は資料費を全体としてみた場合の配分費だが、単行本20.6%に対して雑誌の79.4%はどう読んだらよいだろうか。1対3.85という数字は、利用率の1対4によくきっこうしている。

いいかえると単行本について、一部研究費に依存することによって、資料費比率は利用率に見合うものになっているということ。

表5. 研究費を単行本と雑誌についてみると

	単 行 本	雑 誌	計
研究費	4,250,929	3,135,951	7,386,880
百 分 比	57.5	42.5	100.0

表6. 資料費を単行本と雑誌についてみると

	単 行 本	雑 誌	計
資料費	12,565,674	48,400,756	60,966,430
百 分 比	20.6	79.4	100.0

イン・サービスの利用件数に見合う数字を図書館費に、逆に、もともと、単行本の百分比を(雑誌に対して)19.2%にもっていく必要がある。

19.2%－(マイナス)15.5%で、3.7%、1,982,443円を単行本について余計に支出できていればよかったことになる。(これは平均受入価からすると、和書なら221.1冊に、又洋書であれば84.8冊にあたる)

研究費によるものは研究室に置かれるから、図書館費によるものと違って、利用者のアクセシビリティが問題になる。どの程度まで、どの範囲のものを研究費に依存するか、という基礎的議論が必要とされよう。

つぎにかんがえたこと

国内誌、外国誌の利用率について、あるいはそれそれぞれに対する依存度について

表7. 利用誌数、利用件数を国内誌、外国誌に分けてみると

	国 内 誌	外 国 誌	計
利用誌数	399	457	856
利用件数	9,863	17,224	27,087
百 分 比	36.4	63.6	100.0

一回以上利用されたことのある雑誌をあげると、表7のように、外国誌の方が1対1.15で高い数字になっている。又、利用件数を比べると、1対1.75と外国誌に2倍近く偏った数字になっていることがわかる。

表8. 相互貸借借方誌数, 件数からみた国内誌, 外国誌

	国内誌	外国誌	計
相互貸借借方誌数	92	500	592
百分比	15.5	84.5	100.0
相互貸借借方件数	151	867	1,018
百分比	14.8	85.2	100.0

相互貸借借方誌数をみると、1対5.4の比で外国誌に対する依存度が高く、借方件数比も、1対5.8と同程度外国誌に対して依存していることがわかる。

表7と表8の数字を合算すると、(誌数に重複がないものとして単純に合算すると)表9のように、誌数、件数ともに約1対2(1.95)の比で外国誌に対する依存度が高いという結果になった。

表9. 利用誌数, 件数と相互貸借借方誌数, 件数を合算すると

	国内誌	外国誌	計
誌数	491	957	1,448
百分比	33.9	66.1	100.0
件数	10,014	18,091	28,105
百分比	35.6	64.4	100.0

表7, 表8の誌数を表9の誌数からみると、国内誌、外国誌の充足率は、それぞれ81.3%, 47.8%と算出され、外国誌の充足率は50%に満たないことになる。

一方、相互貸借件数を1誌あたりでみると、国内誌1.6, 外国誌で1.7件になり、分散傾向がハッキリしていれば、外部に依存するサービスとしてよく機能しているといえる。

なお、1回以上利用された1誌あたりの(館内)利用件数は、表7から、国内誌で24.7件、外国誌で37.7件となる。それぞれの雑誌について、こうした数字を越える回数を外部に依頼することには、問題があろう。

いずれにしても、こうした計算は容易にできるものなので、うまく組み合わせて参考にしたらよいようだ。

和、洋の単行本の利用率について、又は各々について依存度を考える

貸出件数を和、洋に分けて集計することは、ルーチン・ワークのなかにはないので、1983年一カ年間に就いてのものが、同僚によって出来ているので、これをつかう。(表10)

表10. 単行本を和、洋に分けて貸出件数をみると(1983年対象)

	和	洋	計
貸出件数	6,336	226	6,562
百分比	96.6	3.4	100.0

貸出件数比では圧倒的に和書がつかわれている。これを図書館費のなかで、昭和60年度についてみると、一応1対1.8の比で洋書に対するものが多い。

表11. 図書館費から和、洋の単行本をみると

	和	洋	計
図書館費	2,959,560	5,355,185	8,314,745
百分比	35.6	64.4	100.0

表12. 和、洋の単行本の受入冊数を図書館費についてみると

	和	洋	計
受入冊数	330	229	559
百分比	59.0	41.0	100.0

対比されるべきなのは、利用比(表10)と受入冊数比(表12)になるかもしれない。

受入冊数比以上に、というかあまりというか、洋書は利用されていない。(数字的には、単行本の複写利用をあげなければいけないが、昭和60年度について、表3のように全体で223件なので、利用比の傾向は変化しないだろう)

受入冊数比和書1.4対洋書1, に対して28.4対1という利用比は落差が大きすぎて評価しにくい。

からめ手から、せめよう。

たとえば、カウンターの近くにポスター形式の「医学書新刊」（日本医書出版協会）1986年9月のものはっており、数えると56冊載っている。概算すれば年間672冊になるだろう。これを、表12の受入冊数とくらべると、単純計算だが、49.1%しか満していないことになる。利用件数からは和書について圧倒的な依存度をいうことができるのに。

和書についての基礎的議論が必要とされよう。
研究費部分の動向をみる必要があるかもしれない。

表13. 研究費を和、洋の単行本についてみると

	和	洋	計
研究費	4,250,929	3,135,951	7,386,880
百分比	57.5	42.5	100.0

表13の数字から、研究費の和書にたいするわずかの偏りを読むことができるが、これは図書館費の場合と逆。（利用件数からする）洋書に対する依存度は全体として、外国誌に対するものにくらべて弱いようだ。収書行動面で、この点をもっと考慮すべきだろう。

今一つ問題とすべき点は、資料費配分について、研究費部分に対する依存の程度をそれぞれについて明らかにすることだろう。

表14. 資料費に占める研究費の比率をみると

	国内誌	外国誌	和書	洋書
百分比	9.6	6.3	24.3	38.1

表14からは、単行本について、研究費に対する依存傾向が高いことがうかがわれる。研究費部分に対する過度の依存は、利用者単位の一部でしかないので、利用者一般としてアクセシビリティをどう確保するかという角度からは、問題があるとおもわれる。

そこまでいうまえに、つぎのことを考慮すべきか。

1. 図書館の収書に対する不足感
2. （1にかかわらず）手元で利用したい（という意向があること）

この問題のカギは、雑誌に対する態度にもとめることができる。図書館費に対する依存度は外国誌では高

く洋書では低いということ。利用行動面での違いが示唆される。

結論的に

全体として、いえることをまとめると、つぎのようになろう。

1. 利用件数からみると、約1対4の比率で（単行本に対して）雑誌がよくつかわれている。
2. 1を資料費全体でみると、1対3.85で同じく雑誌の比重が高い。
3. 図書館費でみると、単行本にわずかに比重を移せば利用比にバランスすること。
4. 国内誌、外国誌に対する依存度はイン・サービスの利用件数からは1対2の比率で外国誌が高い。
5. 貸出件数から和、洋の単行本をみた場合と、図書館費配分からみた場合の間につよいアン・バランスがあること。
6. 単行本について、研究費部分に対する依存傾向がみられるが、アクセシビリティ一般といった点から問題がこのころ。

このほかにも、すこしのことがいえそうだが、基礎的議論の必要性についてかんがえてみた。

平易な数字をつかったものなので、こころみ方もいえると思われるが、足元を固めるための数字ということで、この方法は一応評価できるとかんがえられる。

謝辞

この小論中のいくつかの数字については、同僚がルーチン・ワーク、その他の仕事のなかでこころみた集計結果によっている。記して感謝したい。和、洋の単行本の貸出件数についてのものは、本多貞夫氏の、雑誌の複写誌数、件数関係は矢島千尋さんの手になるものをつかせていただいた。

参考文献

- 1) Wakeley P. J., May R.S., 共編。第4章
図書選択と蔵書構成。4.1 選書方針。ヘルスサイ
エンス図書館員の基礎知識。菅利信・他訳。東
京，日外アソシエーツ，1986. pp. 38-41.
- 2) Beatty W.K. Chapt.4 Technical Processing.
pt.1. Selection, Acquisition and Weeding.
Handbook of medial Library Practice. 3rd
ed. Annan G.L., Felter J.W., eds.
Chicago, Medical Library Association,
1970.pp. 71-92.

*

*

*